

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：14701  
研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2011～2013  
課題番号：23720049  
研究課題名(和文) トンマージョ・ラウレーティ研究

研究課題名(英文) Tommaso Laureti Studies

研究代表者

高橋 健一 (TAKAHASHI, Kenichi)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：70372670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)： 画家・建築家・水道技師のトンマージョ・ラウレーティ(パレルモ1530年頃～ローマ1602年)の業績を再考した。とりわけその代表的事業、ボローニャの《ネプチューンの噴水》(1563～1567年)とローマ、コンセルヴァトーリ宮殿の「諸隊長の間」のフレスコ画装飾(1587～1594年)については、新しい見解を提示している。これらの成果をとおして、ジャンボローニャからカラヴァッジョへ、という時代の美的趣味の変化を、ラウレーティが牽引してきた存在であるということをも、明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This study considers the artistic career of Tommaso Laureti (c.1530 Palermo-1602 Rome), painter, architect, and waterworks engineer. It presents some novel perspectives especially on his two representative projects, the Fountain of Neptune in Bologna (1563-1567) and frescos in the Sala dei Capitani of the Roman Palazzo dei Conservatori (1587-1594). The results of the research clearly indicate that Laureti played a major role in influencing changes in the aesthetic tastes of the time, namely, the change from Giambologna to Caravaggio.

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：西洋美術史

キーワード：トンマージョ・ラウレーティ ジャンボローニャ 対抗宗教改革 マニエリスム ガブリエーレ・パレオッティ ボローニャ ローマ 噴水

## 1. 研究開始当初の背景

トンマーズ・ラウレーティ(パレルモ 1530 年ごろ～ローマ 1602 年)は、セバスティアーノ・デル・ピオンボの弟子で唯一成功した画家だと、ヴァザーリに認められている。その師の死後のラウレーティは、1550 年代のローマでおそらくはヴィニョーラに付きながら、建築家そして水道技師としての研鑽を積んだのだろう。ボローニャに移住した彼がヴィッザーニ家の邸館に 1562 年までに完成したクワドラトゥーラは、ヴィニョーラの遠近法理論の模範的な実践例としてエニャツィオ・ダンティに称讃された。ジャンボローニャの彫刻で知られる《ネプチューンの噴水》のために「作品/事業の建築家」ないし監督として指名されたのも、このひとに他ならない。1570 年代のボローニャに複数の印象的な祭壇画を遺したラウレーティは、その後ローマに戻り、ヴァチカンとカンピドーリオという聖俗それぞれの中心に大規模なフレスコ画を求められている。アカデミア・ディ・サン・ルカの第 2 代目の総裁職に就いた彼は、同時代の美術界のまさに中心の立場にあった。

ヴァチカン宮殿の「コンスタンティヌスの間」のヴォールトに描かれたその《異教の偶像にたいする十字架上のキリスト像の勝利》は、事実、いわば対抗宗教改革の趣味を図解したようなものとみなされるだろう。ラウレーティの業績の系列それ自体が、ミケランジェロからラファエッロへという、時代のパラダイムの変化の指標として機能しうる、とすら言えるかもしれない。

にもかかわらず、従来、ラウレーティの仕事は、断片的にしか記述されてこなかった。その個々の活動の実態についても、不明な点が多かった。

## 2. 研究の目的

本研究は、そのラウレーティの業績の詳細と全容を明らかにし、美術史における彼の位

置と役割を見極めることを、本来の目的としていた。

たとえば、マニエラの奇想を凝らしたエロチックな《ネプチューンの噴水》(1563～1567 年)については、未実現のデザイン案を記録したラウレーティ自身の素描が、各地に複数遺されている。その噴水事業の注文をおこなった、ボローニャの教皇特使代理ピエル・ドナート・チェージは、アンドレア・アルチャーティの弟子としてルネサンス的人文主義を体現した人物だが、そのチェージと、そして頂上の彫刻を担当したジャンボローニャを前に、ラウレーティはどの程度、最終的なアイデアに関与していたのか。

現在確認されるラウレーティ単独での最初の仕事、ボローニャのパラッツォ・ヴィッザーニのフレスコ画連作については、その遠近法が話題となる一方で、物語場面には近年までほとんど言及がなかった。しかしそこでラウレーティは、珍しいアレクサンドロス大王伝を主題としながら、巧みな解釈をしめしている。注文主のポンペオ・ヴィッザーニは歴史家として名高いが、ラウレーティはこの人物とどのような関係にあったのか。また同じ邸館では、ボローニャにおけるヴァザーリの弟子たち、すなわち P・フォンタナ、O・サマッキーニそして L・サバティーニらがほぼ同時に仕事をしていたが、ラウレーティはボローニャにあって、彼らとどのように共生しないし棲み分けをしていたのか。

ラウレーティは 1574 年以降、ボローニャの聖堂サン・ジャコモ・マッジョーレに巨大な祭壇画を 3 点てがけている。中央に「キリストの復活」を置く 1574 年の三連祭壇画には、その人体のヴォリューム感とダイナミックな動きにおいて、ミケランジェロの様式が強くあらわれている。P・ティバルディに代表される同市のミケランジェロ主義の伝統にあって、それはどのような意味をもつのか。また 1577 年の《聖アウグスティヌスの葬儀》

には、短縮法でとらえられた人物が、印象的に打ちだされている。後にローマにおいて、ラウレーティはこの表現を執拗に繰り返すことになるのだが、それはどのような印象を与えたのか。一方で、1580年代にてがけられた栄光の聖母子をともなう絵は、それら2点とは様相を異にする。奥行きのない簡素なその画面には、聖母子の他にわずか3名の聖人・聖女が登場し、抑制された身振りで地に足を下ろしている。従来の研究者は、ここにガブリエーレ・パレオッティの思想の反映をみてきたが、ラウレーティとパレオッティとの関係は、実際にはどのようなものであったのだろうか。

ボローニャ時代のラウレーティのパトロンには、ときの教皇グレゴリウス13世の甥フィリッポ・グアスタヴィッラーニ枢機卿をはじめ、同教皇の側近が多数ふくまれていた。その信頼をえて、画家はこのグレゴリウスによりローマに呼びだされ、ヴァチカン宮殿「コンスタンティヌスの間」のヴォールトに、《異教の偶像にたいする十字架の勝利》を描いている。キリコの形而上絵画すら想起させるこの特異な作品の成立の事情については、アレクサンドロ・ズッカリが詳しく考察している。早期完成を執拗に迫る次の教皇シクストゥス5世に妥協して途中で制作を切り上げたために生じた、いわば偶然の産物ともみなされるこの作品だが、本来はどのように着想されていたのか。

パレオッティとの精神的・実際のつながりは、1580年代以後のラウレーティにとってきわめて重要だったと、報告者は当初から推測していた。ラウレーティは1594~95年にアカデミア・ディ・サン・ルカの第2代総裁を務めているが、パレオッティがそれとタイミングを同じくして当の機関の庇護者の地位に就いているのは、偶然ではないだろう。生々しいリアリズムをともなう殉教図をパレオッティが推奨していたことは、よく知ら

れる。ラウレーティがボローニャのサンティ・ヴィターレ・エ・アグリーコラやローマのサンタ・スザンナのために表した殉教図、そして彼がフェッラーラの「死の祈りの大兄弟会」の小礼拝堂のために用意した、十字架に釘で打ち付けられるキリストという珍しい主題をともなう図像は、どのような経緯で生み出されたのか。

そして、ラウレーティ最大規模の作品、古代ローマ史に取材したカピトリノ宮殿の「隊長の間」の壁画装飾(1586~95年)は、どのように理解されるのか。これは従来ではラファエッロやミケランジェロからの引用の織物とも評されてきた。また、レッジョ・エミリア、サン・プロスペロの《聖母被昇天》は、最初の作者ラウレーティの死ののち、ルドヴィコ・カラッチの工房に移されて、そこで完成されたものだが、ラウレーティとカラッチ一族はどのような関係にあったのか。その他、典拠にはラウレーティの作品として記録されながら、確認・紹介されていない事例も多いが、それらはどのようなものなのか。

これらのような個別の問題について考察をおこない、その結果をもとに、トンマーゾ・ラウレーティの生涯と作品を、彼が生きた時代の美術的環境とあわせて、ひとつの全体として記述することを、目指した。

### 3. 研究の方法

なによりも、作品のある全現場におもむき、それらを詳細に観察・記述したうえで、良質の写真を確保する必要があった。たとえばボローニャのパラッツォ・ヴィッザーニの「アレクサンドロス大王伝」の連作については、従来の図版では、当地に遺される全6場面のうちの1場面のみが紹介されていたにすぎなかった。ラウレーティ作品の写真のほとんどは、ボローニャとローマの各美術等監督局で入手できた。しかしそれらの機関にも保存されておらず、また保存されていても写りが不十分な場合には、自ら撮影を試みた。従来の

論考では見過ごされてきた、画面内の細部や、ラウレーティ自身が用意した額縁等の周縁的な要素にも、撮影にさいしては細心の注意を払った。あるいはヴァチカン宮殿の《異教の偶像にたいする十字架の勝利》については、美しい図版がなんども公刊されていたが、その周囲のイタリア、ヨーロッパ等の寓意像（一説には弟子のA・スカルヴァーティの作）をふくめて、装飾プログラムの全体をみわたせる広角の視野を提供してくれるものはなかったため、それを確保した。

文書資料についても調査をすすめていった。ラウレーティのボローニャでの活動についてはトゥテルやベルセッリが、ローマでのそれについてはスペツァツフェッロやティットーニ、ズッカリらが、事業の企画書や契約書などの発掘をとおして再構成を試みていたが、そこではそれらの資料自体の翻刻・引用が断片的にとどまる場合もすくなくなかった。ボローニャ市立図書館アルキジナジオに所蔵される、《ネプチューンの噴水》にかんする報告書は、美術家本人の書いたもので、その彼の当時の考えや人脈を知る上でとりわけ貴重である。これについては時間をかけて読み込んだ。また、こうした先行研究の脚注において指示された配置番号をてがかりに、時間の許す限りにおいて、周辺の文書も参照した。ヴァチカン図書館に所蔵される、フィリッポ・グアスタヴィツラーニ枢機卿がラウレーティに宛てた3通の手紙の写しは、現地で参照して写真を入手したうえで、ていねいに翻刻をおこなった。これらは《異教の偶像にたいする十字架の勝利》の注文の経緯を再構成するうえで、きわめて貴重な資料である。他にも、ヴィッザーニヤリアーリオ、ピアンケッティ、マニャーニなど、ラウレーティを雇用したことがある一族に関連する文書を、みていった。

ヴィニョーラの『実用的遠近法の二つの規則』（1583年）では、ラウレーティがパラッ

ツォ・ヴィッザーニの装飾に用意した舞台背景が、版画により複製されている。その版本については、オリジナルを参照して、必要な図版を複写したうえで、監修者エニャツィオ・ダンティのコメントを読解した。他にも、たとえばモンジトーレの『シチリア人美術家列伝』など、ラウレーティにかんする前近代の文献で、参照できていなかったものを、参照した。

一方で、ラウレーティと同じ時代を生きた、後期マニエリスム／初期バロックの美術家たちの織りなす社会については、いまだよくは知られていないから、ラウレーティと彼らの相互の影響について把握するために、さまざまな情報源から作品ないし作者にかんするデータを集めた。シチリアでは、彼の郷里のパレルモにて、その若き日に見たであろう作品を参照した他、メッシーナでは、モントルソリの手になるふたつの噴水彫刻を観察、写真撮影している。モントルソリの2点は、ボローニャの《ネプチューンの噴水》の先例としていずれも重要である。

ラウレーティの画業の後半部分を理解するための鍵となるガブリエーレ・パレオッティとその『聖俗画像論』については、報告者はすでにいちど研究対象としたことがある。しかしその思想・教義が同時代の美術界にたいして浸透した方法・速度・範囲・深度については、実態をじゅうぶんに理解できていたとは言いがたいので、その問題についてあらためて考察した。

1590年代のアッカデミア・ディ・サン・ルカについても理解を深めようと試みた。同アカデミーの最初の正史をまとめたロマーノ・アルベルティは、初代総長フェデリコ・ズッカリの系譜を正統とみなす立場から、第二代総長ラウレーティの教育活動・機関運営には否定的な見解をしめしている。その意味について、先行研究に助けを借りながら検討した。また、同機関の庇護者としてパレオッ

ティ枢機卿がもった影響力についても、考察した。同アカデミーの現在の拠点では、オラツィオ・ボルジャンニに帰されるラウレーティの肖像も観察した。

#### 4. 研究成果

本来の目論見では、より多くの新知見がえられるものと期待されたが、正直なところ、現在までそれは質量ともに限られたものに留まっている。とはいえ、収集した資料の整理・分析は、いまだ完了していない。作業を続けたい。

一方で、本事業の開始後には、アンナ・キアラ・フォンタナ、サミュエル・ヴィターリ、イングリッド・デットマン、マリア・ジュゼッピーナ・マツォーラさらにはファウスト・ニコライといった研究者が、タイトルにトンマーゾ・ラウレーティの名のついた論文を、次々と発表した。ラウレーティの重要性が今日ますます認識されてきていることを、この現象自体がしめしているといえよう。もっとも、これらの議論も、いまだラウレーティの業績の断片を扱うのに留まっているのであって、今後は、これらの論文に提示された注目すべき知見を組み込むかたちで、体系的なラウレーティ論をまとめる試みをおこないたいと考えている。

そのラウレーティ論の一部を構成することになるものとして、現在までにふたつの論文を完成させている。そのひとつはポローニャの《ネプチューンの噴水》を扱う。

従来の研究では、その装置全体の図像プログラムがラウレーティに負うことが共通して認識される一方で、頂上のネプチューンの着想は基本的にジャンボローニャに帰されていた。それにたいして、本論文では、当のパレルモ人美術家とその噴水の彫像の生成にも大きく関与した可能性を指摘している。そのさいに注目されたのが、ポローニャ、パラッツォ・ヴィッザーニの「アレクサンドロス大王伝」という、若きラウレーティが当の

噴水事業開始前に実現したフレスコ画サイクルのうちの一場面、《ゴルディオスの結び目を解くアレクサンドロス》である。その画面中央上方には一体の彫像が描かれているが、それはシルエットにおいて、ジャンボローニャがポローニャのマッジョーレ広場に仕上げたネプチューンと、おおよそ対応する。ラウレーティとモントルソリとの接点についても、論文ではあわせて考慮された。モントルソリは、ネプチューンを主題とする噴水を、すでに 1550 年代のメッシーナにつくりだしていた。そのネプチューンは、ポローニャの噴水のものに似ている。ジャンボローニャが準備段階で用意した、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館にある粘土モデルそしてポローニャ市立中世博物館にあるブロンズ製モデルを、これらの事実をふまえて分析することで、完成作にいたる流れを再構成した。

また、この論文では、ジャンボローニャのキャリアにとって、ラウレーティとの関係がきわめて重要であったことを、上述の知見をもとに、あわせて論じている。ジャンボローニャは 1577～1579 年、ルッカの聖堂サン・マルティーノの「自由の祭壇」のために、復活するキリスト、聖ペテロそして聖パウリヌスの 3 体の立像から主としてなる、大理石の構造物を造り出した。具体的には、その視覚的源泉を、ラウレーティの 1574 年の三連祭壇画《復活するキリスト、聖ヤコブそして聖アウグスティヌス》（ポローニャ、サン・ジャコモ・マッジョーレ聖堂、中央礼拝堂）に求めている。他にも同論文では、ジャンボローニャが、その晩年の十字架上のキリスト像（フィレンツェの聖堂サンティッシマ・アヌンツィアータ内に彫刻家自らが取得したソッコルソ礼拝堂に用意されたもの）のために、ラウレーティの《異教の偶像にたいする十字架上のキリスト像の勝利》に登場するキリスト像を参考にしたことを、マイケル・W・コ

ールの議論をもとに、指摘している。

また、同じこの論文では、フィリッポ・グアスタヴィッラーニ枢機卿がラウレーティに宛てた3通の手紙の写し(ヴァチカン図書館所蔵)を、翻刻・公刊した。ヴァチカン宮殿「コンスタンティヌスの間」の《異教の偶像にたいする十字架上のキリスト像の勝利》の制作をラウレーティに委嘱することを発案したのはエニャツィオ・ダンティだと、ヤコブ・ヘスとアレッサンドロ・ズッカリは推測していたが、ヴァチカンの資料は、その科学者が同じフレスコ画の企画にたいして積極的に関与した事実を、少なくとも証明してくれている。

そしてもうひとつの論文は、ローマ、コンセルヴァトーリ宮殿の「諸隊長の間」のフレスコ画装飾という、ラウレーティ晩年の重要な仕事を扱う。この一連のフレスコ画は、「参照指示と引用の意識的な遊び」とも「すでによく知られて利用された形態やイメージのアンソロジー」とも、(否定的に)評される。しかしこれは同時代のローマで最も重要な絵画作品のひとつとして、次世代の美術家たちにもすくなく影響をあたえていた。本論文では、その表現の特質を、ガブリエレ・パレオッティらによる対抗宗教改革期の美術理論との関係において、理解しようと努めた。

ジャンボローニャとカラヴァッジョという、時代を画するふたりの巨匠をすら自ら牽引する、そうしたラウレーティの姿が、すでに論文のかたちでまとめられたこれらふたつの研究成果によって、ある程度は浮き彫りにされたのではないかと思う。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

Kenichi TAKAHASHI, “Da Tommaso Laureti a Giambologna: un’osservazione”, *Strenna Storica Bolognese*, LXIII, 2013, pp.

387-400. [査読あり]

Kenichi TAKAHASHI, “Da Tommaso Laureti a Caravaggio: un’osservazione”, *Artes*, XV, 2014(印刷中). [査読あり]

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

高橋 健一(TAKAHASHI, Kenichi)  
和歌山大学・教育学部・准教授  
研究者番号：70372670

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：